

与論島を活性化させるために

工学部機械工学科 廣重俊哉 学籍番号：2511210792

一つの地域として発展していく方法には様々ある。それは地理的環境であったり、その土地で働く人々であったり、我々が日々を生活出来ている背景には、何気ない事柄にも多大な問題が関わっている。鹿児島県の最南端に位置する与論島は、そのような出来事を多分に反映している地域であろう。農業、工業、漁業、政治、文化、観光など、どの話題をとっても単純には上手くはいかないことばかりだ。

リーフで囲まれた、美しいサンゴ礁の島である与論島は一見して、漁業や観光に長けている、また少数民族で自然豊かなその島は、政治にも農業にもまた有利であろうと思われる。しかし実際はそのようなことはない。少なくとも現状では、発展している土地ではないであろう。

では、何故自然豊かで環境にも恵まれている島が発展を遂げずにいるのであろうか。一つの大きな問題として、与論島が『離島の中でも本土からとても離れている島』であることが挙げられる。離れているということは、単純に本土と接触が少ないということである。接触が少ないということは、お金の出入りも無ければ、人の出入りも少ないことにつながる。地域として発展させるためには、これだけで経済的にも人材的にもとても大きなダメージである。それだけにとどまらず、朝早くとれた新鮮な魚や、農作物も、鮮度を完璧に保ったまま本土に送ることができない。観光問題にしても、与論島までにかかる費用は決して安くなく、気軽に向かえる場所ではない。

現状に関しての問題だけでなく、これから先の与論島について考えると、教育面が非常に大事になってくるであろうことが予想される。筆者がこれを強く言い切れるのもひとつの理由があるからだ。それは、現在与論島で教育を受けている子供たちが『偏差値』の存在を知っていなかったことである。偏差値を知らない子供たちは、どれだけ才能があっても目標を見いだせず島内だけに埋もれてしまうであろう。子供のうちからもっと広く高いところを目指さなければいけないはずである。高校から本土に出てくる学生もいるが、島にとどまって目標を作らない子供たちがいるのも事実である。殻を破って島の外に出て、広い世界を見て学習させるのが一番の改善策ではないであろうかと筆者は考える。マンネリ化してしまった現状を打破させるためにも、もっと島外の事情を子供たちに教えてあげていかなければならない。そのことが与論島活性化に向けた一番の近道であり、発展につながるであろうと筆者は考える。